



南舞岡小だより

学校所在地 〒244-0814 横浜市戸塚区南舞岡4-15-1 (TEL823-4120,4130)

ホームページ <http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/minamimaioka/>

オキシトシン

校長 平石 英一

蒸し暑い梅雨もそろそろピークを迎えようとしています。プール開きが行われたこの時期、学校の体育は水泳に移行していますが、何分気まぐれな天候に左右される学習ですので、実施可否は天気・気温・水温次第。朝、水泳バッグを肩から提げ、期待感満載で登校してくる子どもたちの姿を目にすると、願いを叶えてあげたいと思うばかりです。

さて、実父が鬼籍に入って丸十二年。先日、十三回忌に合わせて、古郷金沢に墓参に行ってきました。野田山と称するその地は、金沢市内にあります。全域が墓地となっており、鬱蒼とした樹林に包まれています。最近、全国各地で市街地や里山にクマやイノシシが出没したというニュースが流れていますが、野田山も例外ではなく、「クマ出没注意」の看板が立てられています。幸いクマを目にすることはありませんでしたが、2年前にも遭遇した野生のニホンザルの家族に、今年も出会いました。墓参者が多いためか、人慣れしていて向かってくることはありませんでしたが、間近で出会うとやはりどきりとします。

サルと遭遇したときに、目を合わせてはいけないと言われますが、それは、サルにとって視線の向けあいには力関係の計り合いを意味し、一瞥以上の視線を向けることによって、挑発・威嚇となり攻撃を招いてしまうからです。ヒトとサルは動物として近縁種であり、ともに視覚優位の生態をもっているのに、視線の意味に大きな違いがあるのは機能の多様性の差にあります。もちろん人間同士でも互いに危険な状況になることはありますが、それは人間が使う視線の機能のごく一部でしかありません。人間は、愛情、承認、忠告、決意、尊敬など様々な感情表現を眼差しにもたせ、状況に応じて意図的に操作しています。目に関する慣用句が山ほどあるのも、視線の多様性の表れでしょう。たくさんの機能を操作するという事は、そこに多くの作法やルール、解釈があるということに他ならず、高度な精神活動であるといえます。だから、「相手の目を見て話す・聞く」ことが、社会生活や学習の大前提であることにも頷けます。

ところで、ヒトの近縁種ではないイヌと飼い主との間で、親子のような関係が生じているか調べた、動物学者の研究結果も興味深いです。「オキシトシン」というホルモンがありますが、これは別名「愛情ホルモン」ともいわれます。イヌと飼い主のそれぞれの行動とオキシトシンの分泌量を調べたところ、イヌに見つめられた飼い主はオキシトシンの分泌量が増え、イヌを撫でたり抱き上げたりする親和的な行動を起こすことが分かりました。それに伴いイヌもまたオキシトシンの分泌量を増やし、飼い主を見つめるという行動に出、それが互いにスパイラルに形成されるということも発見できたそうです。

イヌと人間の関係においても、見つめ合うことでオキシトシンの分泌量に変化が起きるということは、当然、人間の親子の間でも、子どもに温かい視線を向けることで、ともにその分泌量が増え、愛情深い育児行動がなされると考えられます。さらには、親子のみならず子ども同士、さらには子どもと教師や大人の関係においても、同様のことが言えるでしょう。自分の主義主張を言葉や態度で明確に表現する力が必要になるのがこれからの社会なのでしょうが、前提にあるのは、オキシトシンがたくさん分泌されるような眼差しを伴った、アイコンタクトだと思います。大人のみならず子どもも、個々にスマートフォンをはじめとする情報機器を携帯し、操作する今だからこそ、コミュニケーションの原点に立ち返ることが大切なのかもしれません。